

サンパウロ・ジャパンハウスのチャレンジ

桜井 悌司

サンパウロ・ジャパンハウスのオープン

2017年4月30日（日）、ロンドンやロサンゼルスに先駆けて、サンパウロのジャパンハウスの開所式が挙行された。式典には、日本から麻生太郎副総理大臣兼財務大臣、藺浦健太郎外務副大臣、ブラジル側からは、ミシェル・テメル大統領、アロイジオ・ヌネス外務大臣、ロベルト・フレイレ文化大臣、ジェラウド・アウキミン・サンパウロ州知事、ジョアン・ドリャ・サンパウロ市長など、錚々たる要人が参列した。一般公開は、5月6日（土）から開始されており、会館直後の土日の入場者数は7,509名、会館1か月間で7万5,000人に達した。年間12万人の目標を2か月で達成する勢いである。

開幕時の展示会イベントは、日本の伝統文化と密接に関わってきた「竹（BAMBOO）」をテーマとする展示会で、2か月間開催される。またオープニングの音楽イベントとして、日本が世界に誇る坂本龍一と三宅順とブラジル人音楽家のモレレンバウム夫妻によるコンサートがイビラプエラ公園内の野外音楽堂で行われ、約1万5,000人の聴衆が楽しんだ。

ジャパンハウス計画

ジャパンハウス設置の目的は、積極的かつ戦略的に対外発信を強化する必要性が高まっている中で、主要国における日本の対外発信拠点を設けることにある。取り組みの三本柱は、①日本の「正しい姿」の発信、

②日本の多様な魅力の発信、③親日派・知日派の育成、となっている。日本に関する様々な情報が一括入手できるワンストップサービスを目指すのも重要な役割である。そのため、ロンドン、ロサンゼルス、サンパウロの3都市に、2017年中に開業する。計画推進に当たり、設置場所の選定、建設、内部装飾、事務局体制、ハウス運営のすべてを統括する企業の入札が行われ、3か所の落札企業が下記のとおり決定した。

サンパウロ・ジャパンハウスの概要

（1）施設の概要

- ・隈研吾氏による設計。ヒノキを用いたファサード
- ・サンパウロのビジネスの中心であるパウリスタ通り52番地に位置する。
- ・3フロア約2,500㎡に、展示スペース、セミナールーム、マルチメディア・スペース、レストラン、ライブラリー等の機能を持つ。

（2）ジャパンハウス運営委員会

- ・在サンパウロ総領事を議長とし、その他ブラジル及び日本の有力者8名からなる委員会があり、現地のニーズ等を事業に反映することを目的とする。
- ・著名人としては、サッカーのジーコ、前農業大臣のロベルト・ロドリゲス氏、ブルーツリーグループ社長の青木智栄子氏等が含まれる。



写真1 テープカットするテメル大統領と麻生副総理
(Fotos: Marcos Corrêa/PR)



写真2 両国の関係要人が出席したテープカット
(Fotos: Marcos Corrêa/PR)

(3) 現地事務局の構成

- ・名誉館長－ルーベン・リクペロ氏。元財務大臣、元国連貿易開発会議事務局長
- ・館長・事務局長－アンジェラ多美子 平田氏。ビーチサンダルの「ハヴァИАーナス」を世界的なブランドに育てた。
- ・企画局長－マルセロ・ダントス氏。国際的著名キュレーター、上海万博のブラジル館等を手がけた。
- ・PR 局長－ネリー・カイシュッタ氏。国際的ジャーナリスト、EXAME 誌ブラジル支局のトップを長く務めた。事務局は 15 名体制。
- ・(株) 電通が全体の調整を行う。

サンパウロ・ジャパンハウスの課題とチャレンジ

(1) 政府の補助金の支出は、

2019 年度以降も続けられるのか？

各種情報によると、日本政府は、2015 年度から約 37 億円を拠出し、2019 年度以降は、来場者数や発信力等々の指標に基づき、全般的に評価し、事業のさらなる継続の可能性を判断することになっている。最初から“親方日の丸”で行くと、将来、種々の問題が生じることが予想され、期限を区切って評価をすることは妥当なことである。しかし、一国の文化普及は、元来政府のやるべき業務であり、民間が独立採算でやることは、無理がある。日本にも国際交流基金があるように、主要国でも、英国のブリテイッシュ・カウンシル、イタリアのダンテ・インスティトゥート、スペインのセルバンテス協会、中国の孔子学院等々があり、国際交流基金より財政的にもマンパワー的にも強力である。主要国の文化普及機関は、主として政府の予算で運営している。サンパウロのジャパンハウスは、市内の目抜き通りのパウリスタ通りのビルの中の 2,500㎡の借館料、ボランティア的に安い給与で働いている幹部・従

業員の人件費等を考えただけでも、日本政府の支援なしでは、継続できないと考えるべきである。

(2) 文化活動をどのように評価するのか？

2019 年 3 月までにジャパンハウスの活動を評価することになっている。サンパウロのニッケイ新聞の 5 月 5 日付け記事によると、以前ブラジルを訪れた時に、蘭浦外務副大臣は「来館者数、発信力、広告効果、知日派の数を総合的に判断する」と語っていた。ジャパンハウスの運営陣は、5 月 2 日に記者会見を行った。その際、記者団から、「具体的な目標数値を教えて欲しい」という質問が出されたが、具体的な数字は出なかったようだ。日本の文化普及活動は、欧米諸国に比較し、十分とは言えない。日本人は、従来自分たちの文化を外国人に知らせ、紹介することは得意ではない。評価方法は、この分野で進んでいる欧州の評価方法を採用するのであろうが、ビジネスと異なり、文化普及の評価は非常に難しいことを理解することが必要である。

(3) ジャパンハウスの運営の問題点

ジャパンハウスの実際の運営に当たっては、日本政府による財政支援に加え、法人会員や個人会員を募ることを計画している。さらに展示場・セミナールーム等の貸し出し収入、レストラン・物販収入、ビジネス仲介による収入等が考えられる。展示場の運営は、日本政府が年に 3 回の巡回イベントを計画し、3 都市、各 2 か月程度の展示会を公募で募集することになっている。すでに 3 つの公募作品が選定済みである。その他の期間を利用し、サンパウロ独自の企画展を行うことになっており、前述の「竹」の展示会は、現地企画である。今の時代、何でもやってみないとわからないが、これらの 3 つの企画がロンドン、ロサンゼルス、サンパウロの 3 か所すべてのニーズにうまくフィットすることを期待したい。日本政府は、3 都市の要望するテ

ジャパンハウス 3 か所の落札企業の概要（外務省のホームページより）

項 目	サンパウロ	ロサンゼルス	ロンドン
落札 公示日	平成 28 年 1 月 18 日	平成 28 年 1 月 19 日	平成 28 年 3 月 22 日
落札企業	(株)電通	(株)イー・エス・ビー	ジョーンズ ラング ラサル(株)
契約方法	随意契約	随意契約	随意契約
契約額	3,677,811,000 円	3,615,008,020 円	5,488,897,960 円



写真 3 ジャパンハウス正面（撮影：川上直久氏）

マを的確に把握し、公募の際のプロジェクトの入札に反映させることが大切である。

(4)「戦略的情報発信」と

「政府は口出ししない」の矛盾は？

ジャパンハウスの重要な目的の1つは、「積極的かつ戦略的対外発信」である。一方で、日本政府関係者は、各地のジャパンハウスの企画や運営に「口出ししない」と繰り返し発言している。これは、少し矛盾しているように思える。戦略的情報発信の意味がやや不明確であるが、戦略的情報発信はあくまで政府がやるべきことであって、ジャパンハウスに期待するのは無理がある。しかも上述の説明のように、「日本に関する様々な情報が一括入手できるワンストップサービスを目指す」とあるが、ジャパンハウスにそれを期待するのはあまりに酷である。日本に関する政策がらみの情報発信は引き続き、日本大使館、総領事館、日本貿易振興機構(ジェトロ)、国際協力機構(JICA)、国際交流基金が担うことになるものと想像される。

(5)「伝統的ニッポン」と

「新しいニッポン」の紹介をどう調整するか？

ブラジルには、190万にとも言われる大日系社会がある。1908年に笠戸丸が神戸港を出港してから、来年で110周年を迎える。日系社会は、その間営々と日本文化の普及に努力してきた。サンパウロでは、世界最大の「日本フェスティバル」が開催される。その他「アチバイヤの花とイチゴのまつり」や「桜まつり」もある。また日本ブラジル文化福祉協会の文協ホールでは、頻繁に紅白歌合戦、カラオケ大会、民謡大会、太鼓大会等が開催されている。またサンパウロには流派ごとの茶道、華道、踊り、スポーツ道場が存在する。これらは、いわゆる「伝統的なニッポン」の紹介となろう。一方

のジャパンハウスでは、「いかに日本を知らなかったか」に気づいてもらい「日本に目覚めてもらう」という新たな切り口で「新しいニッポン」を紹介することになる。またそのコンセプトとして、世界のより多くの人々に対して、日本の魅力の諸相を「世界を豊かにする日本」として表現・発信することにより、日本への深い理解と共感の裾野を広げていくという難題に取り組まなければならない。日系コロニアは、ブラジルで日本が高く評価されているのは、110年に及ぶ日系人の努力の賜物という強い自負心を持っている。ジャパンハウスとして、日系コロニアといかに協力・調整し、「伝統的なニッポン」と「新しいニッポン」の両方の広報活動の展開を考えなければならない。

文化交流とビジネスチャンス

ジャパンハウスを何とかビジネスに繋げたいと事務局は、考えているようだ。常識的には、日本の衣食住に関わる商品、技術、デザイン、ノウハウ等をブラジル企業に紹介し、輸入に繋げるということになろう。またブラジル人の嗜好にあった日本食レストラン等の進出も考えられる。筆者の経験から言って、文化普及をビジネスと結びつけるのは至難の業と言える。何故なら、ビジネスマッチングを円滑に行うには、ジェトロ、JICA、ブラジル日本商工会議所、サンパウロ工業連盟(FIESP)、業種別産業連盟等の団体を巻き込んだネットワークをつくる必要があるからだ。1つずつ、サクセス・ストーリーを作っていくようにすべきであろう。

ではどうすればサンパウロ・ジャパンハウスを成功に導けるか？

筆者の経験から言って、例えオリンピックでも万国博覧会でも直前まで一般市民には十分に周知されないのが通常である。しかし、今回のサンパウロ・ジャパンハウスの周到な広報活動は極めてプロフェッショナル



写真4 来場者で混雑するジャパンハウス(撮影:川上直久氏)

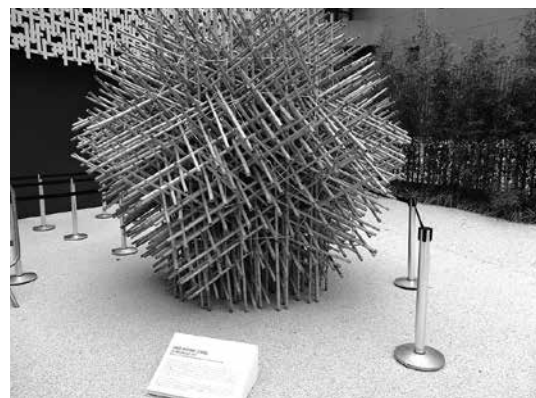


写真5 「竹」の展示会風景(撮影:川上直久氏)

ルで見事なものであった。多数の動画を駆使し、ジャパンハウスの建設の節目節目で広報活動や記者発表を行って、新聞雑誌、テレビ等で多く取り上げられた。また4月8日から5月7日まで、花で飾られた30台の自転車で30日間、市内の有名スポットを回ると言う「フラワー・メッセンジャー」プログラムも秀逸である。また、常識的には、ジャパンハウスを立ち上げるのが一番難しい都市と思われるサンパウロが、ロサンゼルスやロンドンに先駆けてオープンに至ったことは驚くべきことであり、現在の事務局体制や調整役の(株)電通の果たした役割も高く評価されるべきである。このように出足は好調であるが、今後、ジャパンハウスを成功に導くにはどうすればいいかを考えてみよう。

このプロジェクトは、日本とブラジル間の久方ぶりのナショナル・プロジェクトと考えるべきであり、すべての当事者、関係者が真剣に協力し合い、成功に導くように努力することが重要である。日本政府、大使館、総領事館は、財政支援はもちろんのこと、戦略的な情報をコンスタントに提供するとともに、ジャパンハウスが最も動きやすいような環境作りに、最大限支援・協力することが必要である。

ジェットロ、JICA、国際交流基金の本部及びサンパウロ事務所は、それぞれの組織が持つ、展示会、招へい、

派遣、セミナー、研修、調査活動等のツールを必要に応じ、提供することが望まれる。ジェットロは、ビジネスマッチングに協力し、文化普及の最重要活動である「日本語普及」については、基金とJICAは従来にもまして強化することが望まれる。

ブラジル日本商工会議所や日本の進出企業は、ジャパンハウスの法人会員やスポンサーに積極的に名乗りを上げるべきであり、従来、ホテルやレストラン等で行っているパーティやセミナーなども極力、ジャパンハウスの施設を活用するという配慮が必要である。ブラジル日本文化福祉協会(文協)やブラジル日本都道府県人会連合会(県連)等日系コロニアも従来の経緯もあるが、ジャパンハウスは、日系人社会に対するさらなる高い評価に繋がると考え、積極的に協力することが望まれる。ブラジル政府、サンパウロ州・市、サンパウロ産業連盟等ブラジル社会への協力依頼については、ジャパンハウス事務局の得意とするところであろう。筆者も箱物の運営に苦勞したことがあるが、常に初心を忘れないことが成功のカギである。

(本稿は、筆者の個人的意見である。)

(さくらいていじ 元ジェットロ 監事、ラテンアメリカ協会理事)

ラテンアメリカ参考図書案内



『108年の幸せな孤独 ―キューバ最後の日本人移民、島津三一郎』

中野 健太 KADOKAWA

2017年1月 238頁 1,700円+税 ISBN978-4-04-103842-0

新潟県新発田市で1907年に生まれ、20歳の時に農業移民としてキューバへ渡った日本人移民一世の最年長者だった島津三一郎さんが2016年7月に108歳で亡くなった。キューバへは20世紀半ばまで1,200人の日本人が渡り、ほとんどが農民として暮らしていたが、第二次世界大戦中はバチスタ親米政権下で敵性国民視されて約3年間は強制収容所に入れられた。戦後フベントウ島で地道にスイカ等を栽培し生活が好転しかけたが、バチスタ元大統領のクーデターによる政権奪取、独裁政権を倒そうとするカストロの武装蜂起とキューバ革命、米国による傀儡武装勢力の侵攻とキューバ危機、経済援助を依存してきたソヴィエト連邦の崩壊と米国との対立激化といった次々と続く情勢の激変に見舞われた。革命後農地は国有化され、米国との断交でスイカの輸出は出来なくなって農家収入は減り、経済の困窮から米国に亡命する日系人子弟も少なからず居た中で、歯を食いしばって農業でぎりぎりの生活を堪え、1997年にフベントウ島の老人ホームに入り終の棲家とした。

著者はキューバで学んだこともある映像ジャーナリスト。度々キューバと新潟を訪れ、島津さんや多くの関係者にインタビューしている。島津さんが年金だけで賄えた晩年の「幸せな孤独」は、それを支えたキューバの医療制度の手厚さが背景にあると指摘している。

(桜井 敏浩)